

パネルディスカッション４：在宅リハビリテーションの現状と課題

演題名	在宅ケアにおける理学療法士の課題と展望
-----	---------------------

概要

【はじめに】

高齢多死社会を迎えていく日本において、在宅ケアでの理学療法士が求められる時代となってくるであろう。しかしながら、全国に10万人近くいる理学療法士は8割以上が病院等の施設に勤めており、平均年齢も32.8歳と若く、経験年数も10年未満が半数以上と、地域で生活するというイメージが確立できず、在宅ケアにおいても、病院と同じような理学療法が展開されてしまう。その課題を解決するため、現在、全国において訪問リハに特化する研修等が増え、在宅ケアにおける理学療法士の役割を明確にする取り組みがなされている。そこで、私が考える在宅ケアにおける理学療法士の役割を二つの視点から示していきたい。

【病床数の低減・在院日数の減少に対して】

医療保険の財源の問題から病床数の低減、在院日数の減少が進む中、発症早期や疾患の回復途上に在宅で関わる可能性がある。例えば、医療・介護関連肺炎（NHCAP）診療ガイドラインにおいて薬物療法とならび、口腔ケア、体位変換等の呼吸理学療法を実践が求められている。また、病院や施設とは違い、多くても1週間の中で2時間程度しか関わる事が出来ないため、理学療法士が関わらない時間を本人や家族、多職種とともにリハビリマネジメントする能力も求められている。

【在宅生活でのハリのある生活を目指して】

病院では、主に異空間であり当事者との関係性が提供者側と非提供者係となりやすい。また、リスク管理の面から危険性を意識する事となり、対象者の主体性が失われてしまう。基本的には、理学療法士は基本動作の改善を中心に意識する事となるが、在宅で生活している人としての活動に意識を持ち、活動を抑制する考え方に固執する事なく、可能性を探る意識を持ちながら、住環境のみならず地域に出るための方策を共に考える関係性を作る必要がある。つまり、人に寄り添う専門家としての役割が求められるであろう。

【最後に】

これからの在宅ケアでの理学療法士の役割は、職域として意識的に広く持ちながら、一方ではミクロに一方ではマクロに展開していく必要がある。くわえて、私たち専門職だけでは、立ち向かえない時代が到来するであろう。そのためには、当事者自身の活動を促すともに、私たち自身も地域住民に発信して行く事が重要となる。少しでもリハビリテーションマインドを地域の人たちに知ってもらうことで、地域、街全体が自分たちの住み良い街になっていくと考えている。